

月刊

いじろのとも

第一巻

五月号

護摩火よ

護摩火よ

燃えろ

多くの人の願いを

天まで運んでおくれ

一心に

般若心経を唱えながら

皆が幸せに

なりますように

障害児の

住みやすい

世の中に

なりますように

と祈る

雨の中でありながら

その思いを察してくれたか

火はぐんぐんと

燃え上がっていく

ああ護摩火よありがとう

お前のお蔭で

仏様はきつと願いを

お聞き下さることだろう

幸せになりたい人は

四、人の心を感じる心をもつこと

「幸福になる生き方十ヶ条」 第四条 「人の心を感じる心」を養うように努めること。

今月号は第四条について解説いたします。

いきなり質問で恐縮ですが、私たち人間が、動物と違うところはどこだと思われませんか。この質問が今回の解説の中心問題になりますので、少し考えて頂きたい訳です。

では一緒に考えていくことにして、先ず私の考えを述べさせていただきます。「人間は考える動物（葦）である」とか、「人間は社会的動物である」とか、「人間は工作をする（物を作る）動物である」とか、色々言われてきました。それぞれに真理が含まれていると思いますが、私は「人間は社会的動物である」ということばをもう少し分かりやすく、かつ実用的にして「人間は人の心を感じる心をもつた動物である」と言い換えたいのです。社会的ということをも「人の心を感じる心」をもつ事と捉えている訳です。それを人間の本質の一つと考えている訳です。

最近は科学が発達して、科学さえあれば人生の全てのことと解決できる、だからそれ以外のものを考えたり、信じたりすることは不必要だし、間違いでもあると考えている

人が実に多いようです。例えば、多くの心理学者は動物も人間も同じ心をもっていて、動物の心を調べれば人間の心がかかると考えています。また、比較行動学者もサルや動物や社会を調べれば、人間のことが分かると考えています。こうした考え方は、人間を動物としてだけ見た見方であると思うのです。人間を動物の延長線上にのみ考えています。しかし本当にそれだけで人間が分かるのでしょうか。やっぱり人間はどこか動物と違ってはいないのででしょうか。確かに人間も動物と同じように生命を維持するため食事を行いますし、種を保存するために生殖行為もします。その点では人間も動物も変わりはありません。生理現象としては同一のメカニズムが支配しているわけです。自然科学や医学ではそのところを扱っているわけで、人間を動物と同じように考えています。その点では間違っていないと思います。

しかし、人間を人間として問題とするときには、事情が変わってきます。人間は動物を超えたところがあるから人間なのではないでしょうか。私には、今の科学者（特に社会・人文分野の学者）は心理学者を含めて自然科学に毒されて、人間の精神的な面までも、すべて自然現象、つまり物理・生命（生物）現象の延長線上に捉えようとしていると思えてしかたありません。「動物も社会を作って生活している」とか、「動物も考えることができる」とか、「動

物も道具を作ることができる」とかいった心理学者や動物学者の主張は、このことの反映のように思われます。学者からそういわれると一般の人たちは、やっぱり人間も動物なのだからそうなのだと思ってしまう。そのあげくの果てに、人間も動物と同じ行動をしても良いのだといった価値や行動の基準が出来上がって来たとしても不思議は無いように思われます。食べることを追求して海外にまでグルメ旅行をし、性を追求して公娼制度の残る国へセックス旅行をするといったことが公然と行われているのを見れば、このこともうなずいて頂けると思っています。

少しばかり理屈っぽくなってきましたが、人の心を感じるということが動物にはない人間独特のものであることを分かって頂くためにのもです。もう少しおつきあい下さい。

私は、人間は動物を超えたところをもっているからこそ人間であり、そこにこそ人間の尊厳があると思っています。ではその「越えたところ」とは一体何なのでしょう。皆さんは何だと考えられますか。学者の中にすら、そんなものは無い、あるいは不必要だと考える人がいるのですから、これは現代人にとって結構むずかしい質問だと思います。さあお答えを出されましたか。もう答えは出ていますね。

実は私は、「障害児の心理」の研究に携わっています

ここ五、六年は自閉症の研究に打ち込んで来ました。この自閉症と言う障害は世間に間違っていて伝えられた部分があつて、マスコミでもしばしば間違っていて使われています。それはそれとして、私はこの障害の本質を「人の心を感じる心」の障害として捉えています。ワロンというフランスの心理学者の言うところでは、「人の心を感じる心」は「情動」と呼ばれる部分に入ります。つまり、それは人間がお互いに表情や身振り、態度やことばなどによって、心を通わせあう、英語で言えばコミュニケーションしあうという事であると思えます。

実はこの自閉症児は「人の心を感じる心」を自ら失うことによつて、私たちにその大切さを教えてくれています。すでに述べてきましたように、現代人は科学が進めば進むほど、ますます動物化、非人間化してきています。私には自閉症児はこうした現代の趨勢に対する警鐘として、ホトケさまから使わされた使者であるように思えてしかたありません。少なくとも私にはそう思えるのです。

最後に「越えたところ」が何かについて私が考えているところを述べて、これまでの話をまとめたいと思います。すこし理屈っぽくなりますが、皆さんと最後の結論に進みたいと思います。

私は、かつて学んだ大阪経済大学の鈴木亨という哲学の

先生（現大阪経済大学理事長）を私の哲学の師と仰いでいます。これから述べることはその先生の考えておられることです。

皆さんは誰でもが人間は動物から進化したことを御存知だと思えます。実は進化したのは人間だけではなく、人間が進化してきた動物や生物も物から進化したものなのです。物と生命は違うのですが、何故か物から生命が進化しました。人間も動物と違うのですが、何故か動物から進化しました。ではそのおおもとの物は何かから生まれてきたのでしょうか。ここが大問題でして、ここにこそホトケさまの問題があるのです。聞きなれない言葉ですが、鈴木亨先生はそれを「存在者逆接空」とおっしゃっています。真言密教では「大日如来」と言っております。人間が動物を越えたところと言うのは、実はこのホトケさま（空）によってあらゆるものが許され、贈られてあることを知ることなのです。そのことを「あたま」だけではなく、「からだ」と「こころ」で知るとき、人に対して何かしてあげたいと言う「人の心を感じる心」が、自然にわいてくるものなのです。こうなつてこそ、人間は動物を越えた存在と言えるわけです。毎日、ヨーガの修行をし、在家勤行式のお勤めをするとき、誰でもがその境地に達する事が出来ます。今の今からそれらに取り組み始めてみてはいかがでしょうか。

自作詩選

「こころのとも」読後感

「こころのとも」には
いいことが
書いてあるなあ

でも

私には

出来ないことよ

そう思った途端に

ホトケさまの救いから

遠ざかっていく

知ることはいい事

でも行うことは

もつと良い事

人は行いを

通してのみ

救われるのだから

今の今から

ヨーガの行を

始めよう

一日早く始めれば

一日早く救われる

一日怠れば

また一日逆戻りする

うまずたゆまず

毎日しよう

いつの間にか

たましいが救われている

早く迎えにきて

歳をとつてする

苦勞は

身にこたえる

嫁にストレスを掛けられても

それに対抗する氣力すら

湧いてこない

世間体が悪くて

近所の人にも

聞いてもらえない

といつてそれを語り合う

亭主にも

先立たれてしまっている

ただただひたすら

悲しく悲しく

耐えているだけ

お父さん

お願いだから早く

迎えにきて

春の花

さくらはさくら

ももはもも

すみれ

たんぽぽ

れんげそう

ああ

美しいかな

春の野は

花はそれぞれの春を

精一杯に

生きている

良い人と悪い人

良い人とは

自分をすてて

人と心を通わそうと

いつも思っている人

悪い人とは

自分の心にとらわれて

人の心を

無視してしまう人

夜のネオン

全てを

覆いかくす

夜のとばり

派手な

ネオンが

目にはいる

立身出世は

夜の

ネオン

すべての

人間的なものを

見えなくする

真言宗在家勤行式解説（ ）

三歸

弟子某甲 盡未來際 歸依佛 歸依法 歸依僧 （弟子某甲、未來際の尽くるまで、仏に歸依したてまつる、法に歸依したてまつる、僧に歸依したてまつる。）

信仰の告白

ホトケさまのみ教えを聞く身となった私は、ホトケさまとホトケさまのみ教えとホトケさまの教団（真言宗）とに絶対の信仰を捧げ、それをより所として生きて行こう。

三竟

弟子某甲 盡未來際 歸依佛 竟 歸依法 竟 歸依僧 竟
（弟子某甲、未來際の尽くるまで、仏に歸依し竟んぬ、法に歸依し竟んぬ、僧に歸依し竟んぬ。）

信仰の確認

ホトケさまのみ教えを聞く身となった私は、いま既に、ホトケさまとホトケさまのみ教えとホトケさまの教団（真言宗）とに絶対の信仰を捧げ、それをより所として生きて行く気持ちになりました。

三歸と三竟是強い関連がありますので、ここで合わせて取り上げました。ここに述べられています「佛法僧を三宝」さんぼう）と言いますが、この三宝への歸依は、仏教徒にとつての最低の条件と言えます。

このシリーズの（ ）では、仏法を理解したいという希望を述べ、（ ）では仏の前でこれまで知らず知らずの中になしてきた悪業を懺悔（ざんげ）し、今ここに（ ）仏教徒としての絶対の歸依をホトケさまに誓うわけです。現代訳でもお分かりのように、歸依するとは優れたものを信じて依りすぎること、つまり三宝に絶対の信仰を捧げて、依りどころとする事なのです。

私たち人間をはじめ、宇宙のあらゆるものは、全て相対的です。絶対なものはホトケさま（空）しかありません。人間が仏法をはなれ、自らだけを頼りにするとき、相対的なものの悲しさとして、いつも過ちや間違いを犯してしまいます。ホトケさまを信じて、全てをおまかせしましょう。

十三仏の紹介（番外一）

「胎藏界曼陀羅」たいぞうかいまんだら」

不動明王、釈迦如来に次いで、今回は文殊菩薩の順なのですが、前回もちょっとふれましたように、ここに来てやはり曼陀羅を分かって頂かないことには先に進めないことを痛感しますので、今回と次回は胎藏界と金剛界の両部曼陀羅について紹介したいと思います。

さて、曼陀羅とは何かということですが、サンスクリットの語源的には「本質を得る」、つまり仏の無上正等覺という最高の悟りの本質を得ることであるとされています。しかし真言密教に至って悟りを得た場所または道場を意味するようになりました。それがさらに進んで、如来や菩薩などの集合像を描いたものを指すようになりました。ここでもその意味に用います。

図をご覧下さい（インターネット版では省略しています）。

この図は、勝又俊教編著「お経真言宗」（講談社発行）という本から引用させて頂いたものですが、これは大日経というお経に基づいて描かれたものです。少し解説させていただきます。

この図の上半分は、下の全体図のまん中にある中台八葉院を取り出したものです。実際にはそれぞれの○の中にそ

の名前の仏・菩薩の像が書いてあります。中心は大日如来、東西南北の正面が仏で、中間に菩薩が描かれています。今回紹介する予定だった文殊菩薩は南西（右下）におられます。また先月の釈迦如来と同体とされている天鼓雷音仏は北方（左）におられます。

この図の下半分は、大きく分けて十二の部分からなっています。それぞれに院という名前が付けられています。不動明王は持明院に、釈迦如来は釈迦院におられます。

（胎藏界曼陀羅の図 2枚＝省略）

後記

一、今月号から「こころのとも」という誌名の字が変わりました。この字を書いてくださったのは、私の和歌山大学勤務時代の友人で書家の矢萩菱菁（やはぎとうせい）先生です。毎年のように日展に入選されてきた方で、和歌山大学教育学部の書道の先生です。私には、とても力強い字だと感じられるのですが、皆さんはいかがですか。

二、先月号に「愛欲」という詩を載せましたが、この詩が「こころのとも」にはふさわしくない、というご指摘のある読者から頂きました。その方は、私自身が愛欲にはしつていと誤解されるから良くない、と私のことを心配して下さつてのことですが、そこにも少し誤解があるように思えます。少し解説しておきます。前半の句の愛はキリスト教的な愛、仏教では慈悲に当たるものです。後半の句の愛欲は、もちろん淫も含みますが、渴愛、欲愛、あるいは我欲とでもいった方が良い言葉です。でも仏教ではそれを愛欲と呼んできましたので、それを使つたまでのことです。これを作ったのは、私が身近に、私自身が僧侶であることをやめたいような、我欲（もちろん淫も含む）にとらわれたあるモデルを見たからです。

三、「幸せになりたい人は」の部分が少しばかり長くなりました。専門のことで力が入ったようです。お許しを。

月刊 こころのとも 第一巻 五月号	平成二年五月十五日 〒714 笠岡市走出一―三六の一 真言宗醍醐派 走出山 観音寺
	中塚 善成（善次郎） 八六五六 五 七二三

本誌希望の方は、返信封筒（切手）をお送り下さい。

発達・教育・人生相談 受付

筆者は十数年来、障害児をもつ親御さんや登校拒否児・情緒障害児・学業不振児などをもつ親御さんの相談にのつて来ました。ご遠慮なく、電話・はがき・手紙などで事前に、または当日お申し込み下さい。

霊能相談・ご祈祷 受付

いつも壇上でご祈祷して下さっている宮本龍憲師は霊能力の高い方です。お悩みのある方お申し出下さい。